

# 佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

## 道すがら

### 松橋達也

大阪に行かねばならぬ用事ができ、乗り込んだ高速バス。預けた犬たちのことがやはり気になる。コンビニで買ったスポーツ紙も読む気にならない。

アクアトンネルを抜けた時点で、ようやく広げた新聞。「五十七歳キング・カズ、三十九年目のシーズン終了！来年も現役続行を希望！」という小さな記事が目に残った。今年はポルトガルの二部

チームにいたんだ。そのモチベーション半端ないな。それについて自分はどうか。「松橋次長はキング・カズのようなプレイングマネージャーを指してください」と

日頃から里見常務に言われているが、体力と記憶力の衰えを実感する日々。立場と給与に見合う仕事

ができていかと時折真剣に悩む。そういえば武豊騎手も年上だ。まだまだ、いけるかな・・・そんなことを巡らせていると、ほどなく

東京駅に到着とのアナウンス。慌てて新聞をたたむ。カサカサと大きな音が車中に響き、初めて気づく。新聞を広げていたのは自分だけ。世の中変わったものだ。

大阪に行かねばならぬ用事ができ、乗り込んだ高速バス。預けた犬たちのことがやはり気になる。コンビニで買ったスポーツ紙も読む気にならない。途中で「離れずについて！」と叱られる始末。愛犬トイプードルのポムとエルの散歩では、「ねえ、歩くの早すぎ。犬のペー

スに合わせてあげて。馬の調教じやないんだから」と怒られる。結局、いつも叱られ怒られ、私の立場は変わらない。

ペットショップで売れ残り、デイスカウントされていたポム。生後三カ月で捨てられ保護団体から譲り受けたエル。三人の子供たちが巣立った今、この二頭にメロメ

ロだ。朝晩の散歩はもちろん、休日にはささみジャーキーやレバーの水煮を作る。もちろん寝るのも一緒。仕事を終え帰宅すると、どんなに遅い時間でもしつぽをフリフリ、一目散に駆け寄ってくる。そんなワンコたちを、普段トリミ

ングでお世話になっているペットサロンに一泊二日で預けることになったのだ。

前日の夜から、「明日は夏日、部屋を涼しくしてくれるだろう

ちゃんと言ってくれるだろうか」等々、心配は尽きない。いざ当日、覚悟を決めてサロンに向かうと、私の心配をよそに、なんとしつぽを振りながら入口に向かっていくではないか。出迎えてくれたのは顔見知りのスタッフなのだろう、あつさり入室。複雑な気持ちのまま冒頭バスに乗り込んだ次第。障害を持つわが子を誰かの手にゆだねねばならない親の気持ちはこの比ではないだろうが、そのほんの一部を共有できた気がした。

のぞみ三〇号。発車のベルが鳴り終えた。もう引き返せない。ワ

ン子たちはきつと大丈夫。コーヒ

ー片手に、富士山でも拝むか。が、しかし、ワゴン販売は昨年十月末をもって終了したとのこと。また一つ、昭和が消えたか、残念。し

かも悪天候で富士山も拝めずスマホのネットニュースを眺めることに。まあ、なんと情報量の多いことか。ロシア・ウクライナ情勢、

ガザ地区の現状を伝える国際ニュース。野球では大谷翔平、競馬ではダービー等々。ありとあらゆる情報

が洪水のようにあふれ出ている。これだけ情報があふれている時代。正しい情報と本物を見極める力がますます求められることを改めて痛感。

てしまった。車中の景色同様、障害福祉の景色もまた、あつという間に変わったのだ。

最近、「近くでB型事業を始めたいので、対象となる方がいればご紹介ください」とか、「ホームを立ち上げたので、ぜひ見学にいらしてください」など、新たに事業を始めた方が挨拶に来てくださることが増えている。加えてFAXや電話による事業立ち上げや利用者募集の案内も頻繁。資源が乏しく、行き場のない人が多くいたひと昔前とは隔世の感がある。選択

肢が広がることはとても良いことだ。しかし、選択するためには、情報を極める力が必要となる。同様に増えているのが、行政や相談支援事業所、保護者等からか

かってくるこんな電話だ。「ほかの利用者さんとけんかをしてしまい、明日にホームを出ていかなければならない。家庭には帰れないし、行き場もない。受け入れてもらえないですか」「契約時に聞いていたサービス内容と違う。申し

出ると契約を解除されてしまうかもしれないので、伝えるか悩んでいる。空きはないですか」法人ではこのような相談に対し

て、地域のセーフティネットとして機能すべく、短期入所枠を増やし、グループホームの整備も進めてきた。しかし、そのスピード

をはるかに超える勢いで、新たな支援要請が入ってくる。加齢により認知・身体機能が急激に衰え、

今の環境では生活が難しくなってきた利用者也増加傾向にある。はたまた、急激にクローズアップされてきた八〇五〇及び児童施設の十八歳問題。これらに対処すべく、蔵波にお

いて十名のグループホームを建設中であるが、加えて身体介護が必要な方を対象とした日中サービス支援型グループホームの整備も急いでいる。施設やグループホームで暮らす方々の高齢化対応は喫緊の課題である。

「入所施設は地域コミュニティから乖離している。だから地域生活移行を推進していく必要がある。グループホームこそ、多様な暮らしを実現できる場所だ」こんな趣旨の話をしている。確かに旧態依然とした運営を続け、地域とのつながりを持たない入所施設は残念ながらあるのだろう。しかし、一方ではそのような体質のグループホームはないのか。街中

に住居はあるけれど、近所づきあいはないし、地域の行事には参加していない。いやできない。入居者が大きな声を出してしまい近隣住民からのクレームが絶えない。そんな話を耳にすることがある。

先日、恒例となった地元の皆さんと交流グラウンドゴルフ大会を行った。青年寮の子どもたちとグループホームや入所施設で暮らす方も参加したのだが、もうすっかり顔なじみ。「〇〇くん、背が伸びたね。元気にしてる」と声をかけられ、照れくさそうにうなずく子。「いつも道路の草刈り頑張ってくれてありがとう」と声をかけ



地域の方をお招きして開催したグラウンドゴルフ大会

られ、誇らしげな表情を見せる方。その後の表彰式を兼ねた食事会では笑顔に花が咲き、会話がつきなかつたことは言うまでもない。そこにはごくごく自然な人と人の繋がりがあ

るのだ。障害者雇用においても、雇用代行ビジネスに端を発し、雇用の質が叫ばれて久しい。生活の質と雇用の質。すべての人に通ずるものであり、今こそ真剣に向き合うべきではないか。

蔵波も九年目を迎えた。この間、グループホーム四棟、青年寮、心静寮の開設が続き、あつという間に時が流れた。ありがたいことに情熱あふれた若い職員たちに囲まれ、充実した職場生活を送ることができている。

「雨の日でも子ども達がおもいつきり体を動かせるように」との里見理事長の強い思いにより建設中の体育館。理事長のこの仕事にかける情熱、これまた半端ない。順調に工事が進み、来年三月の完成が待ち遠しい。

先日、今年も厳しい夏になるとの予報が出された。妻には負けるが、酷暑に負けず。体力と記憶力の低下にも負けず。昭和のおじさん、まだまだ老け込む歳じゃないぞ。

スマホの見過ぎで目が疲れた。車窓から外を眺めるとキラキラと輝く淀川の水面が。いざ大阪！とこ

ろでなぜ大阪へ？それは秘密です。

（ふる里学舎蔵波 施設長）



## 卒業後新生活への思い

有馬 美由紀

娘がお世話になり始めてからあつという間に十年が経ち、今年ついに特別支援学校を卒業しました。四月から念願だった市原園芸科に通所しております。

ここで少しこども館時代のお話をさせていただきます。冒頭でもありましたが、佑啓会にお世話になり始めたのは小学部からで、初めは五井福祉会館の放課後等デイサービスを利用させていただいていました。通い始めてから暫くして、こども館が私の職場の近くにあることを知り、福祉会館よりもお迎えに行きやすい環境だったので四年生からこども館を利用するようになりました。

小学部の頃からデイサービスに通っていました。最初は全く声を出さず、人と関わろうとせず、とにかく大人しい人でした。ですが、こども館を卒業するころには大きな声を出せるようになり、歌を歌ったりできるようになっていました。一番驚いたのはこども館の職員の方をくすぐったりしてスキンシップをとっていたことです。学校でもそのようなことをしているのは見たことが無かったです。親以外の人に自分からそんなことをするなんて衝撃でした。こども館の方との信頼関係が築けているからこそその行動ですね。ありがとうございます。



スポーツレクリエーション、お月見団子作り、サツマイモ収穫体験、

バレンタインのお菓子作りなどたくさん行事も楽しんでいました。卒業パーティーでは卒業証書とアルバムまでいただき、笑顔でいっぱい写真を見るとこちらまでうれしくなりました。園芸科に通っている今でも近くにこども館があるだけでなんだか心強いです。

慣れ親しんだこども館を卒業し、園芸科に通い始めて一カ月が過ぎました。学校を卒業し通所が始まるまでは、「もう学校には行かないこと」が分かっているのだろうか？二週間くらい通ったら学校に行くと言い出すのではないかと心配でした。でも始まってみると、「もう学校には行かない。こども館にも行かない。これからは園芸科で作業する」と、しっかりと分かっているようで、毎日元気に通っています。内気な性格なのでまだまだ自分を出せていないでしょうが、色々な人に囲まれながらこれから少しずつ成長してくれと期待しています。

今現在通所できることも決まり、安定した生活を送ることが出来ていますが、ここにたどり着くまで色々な思いがありました。

卒業後の一番の問題は子供を預けることができる時間です。学校に通っている間のデイサービスは十八時ごろまで預かりをしている施設が多いですが、卒業して成人になると、ほとんどの施設は早い時間に帰ってきます。「これでは仕事を続ける」とはできない。障害がある子がいるのだから諦めるしかないんだろうか？」と思いました。ですが、仕事は私にとつての生きがいです。出来れば定年まで働きたい。

そんな時、デイレスパイトのことを知りました。十八時まで預かっていただけるだけでも驚きましたが、遅い時間の送迎まであるとは。働いている親にとつてこんなにありがたいことはありません。共働き世帯が増えるなか、それに合わせて柔軟に対応していただき、本当に感謝しております。私たち利用者が利用しやすいということは、それだけ職員の方が大変だということ。頭が下がります。私は週に四日利用させていた

だいていて、おかげさまで仕事を辞めることなく今まで通りの生活を送ることができています。デイレスパイトでは娘もそうですが、親の私も作業科の方とも接することができるようになりました。

作業科での活動の後、デイレスパイトを利用し、疲れているかと思いきやそうでもなく、週末はどこに出かけようかと楽しみみたいです。飛行機が大好きで羽田空港に一カ月に二回は行っています。週末にリフレッシュして平日にまた頑張る。安定した生活を送ることができています。



大好きな飛行機鑑賞♪

ですがまだ始まったばかり。今後がまだまだ心配です。楽しく元気に毎日通えることを目標に、親子共々頑張っていきたいと思っています。

(ふる里学舎 保護者)

## 「新入職員代表挨拶」

泰松 将士

僭越ながら、新入職員を代表してご挨拶をさせていただきます。ふる里学舎、果樹科に配属となりました、泰松将士(たいまつまさし)と申します。

本日は、私たちのため、大変素晴らしい辞令交付式を開催していただき、誠にありがとうございます。緊張と不安はありますが、三十八人の仲間と共に、佑啓会に迎え入れてくださった事はとても嬉しく思います。

先ほど、里見理事長より直接辞令をいただき、新入職員を代表し、心より御礼申し上げます。佑啓会の一員として、スタートできるこの瞬間の感動を忘れることなく努めて参ります。



大勢の職員の前で堂々とした挨拶

少し私の話をさせていただきます。私は淑徳大学出身です。学生時代は野球部に所属し、野球をとおして、多くのことを学びました。

小学校から野球を始めましたが、五年生の時に突然でんかんと医者から診断されました。野球を続けるのはかなり難しい状況と言われ、医者には二択を迫られました。一つ目は、治療に専念し、野球をやめる。二つ目は、薬を飲み続け、野球をこのまま続ける。私は後者の方を選びました。今では普通に暮らすことができますようにりましたが、最初の頃は、良く発作を起こしていました。

毎日朝、夜の服薬と、三カ月に一回の定期健診が必要になり、満足に野球を続けることができない状態になりました。小学校、中学校と、体調が落ち着かなかつたため、当時の野球部部員、友達には多くの迷惑をかけたと思います。それでも、持病を持つある私を理解し、体調が優れなかった時には家まで一緒に帰ってくれたり、嫌な顔一つ見せること無く接してくれていました。今でも変わらぬ付き合いをしてもらっています。

大学で野球を続ける上でも、でんかんという持病は私の選択肢を狭めました。ほとんどの大学の野球部は、でんかんを有する人の入部を受け入れてはくれませんでした。その

中でも唯一淑徳大学は入部が可能であったため、淑徳大学に進学しています。大学では、運転免許を取得することができなかったため、四年間送り迎えをしてくれるなど、寄り添ってくれた仲間を支えられ、卒業まで部活を続ける事ができました。私は本当に良き友人たちに出会い、人に恵まれてきたと感じています。選択肢の限られた淑徳大学への進学でしたが、大切な友人たちと出会えたことに感謝をしています。



淑徳大学野球部時代

これからは支えられる側ではなく、支える側になりたいとの思いが湧き、福祉業界を目指しました。就職活動で佑啓会と出会い、YouTubeなどのSNSを通して、福祉に対する考え方が変わりました。福祉は支えるだけでなく、支え合い共に成長していく事だと気づかれました。

私は佑啓会の「繋がり」が好きです。地域との繋がり、利用者とその家族との繋がり、職員同士の繋がり、先輩職員の方々が繋げて下さった伝統を私共新入職員一同大切にしていきたいです。



利用者さんと楽しく BBQ

入職後は、同心協力という言葉に胸に、心を一つに協力し合い、職員だけでなく利用者とその家族とも団結し、福祉業界と佑啓会の発展に少しでも貢献できるように頑張ります。

社会人一年生の私たちは右も左もわからない未熟者ですが、何事にもチャレンジしていく気持ちで、一日も早く一人の職員として働けるよう全力を尽くす覚悟でございます。ご迷惑をかける事もあると思いますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

以上、簡単ではございますが、私から、感謝と決意の言葉とさせていただきます。ありがとうございます。

(ふる里学舎 支援員)



辞令交付式の密着動画を YouTube で公開しています。ご視聴よろしくお願ひします。



編集後記

新年度が始まりもう三カ月が過ぎようとしています。緊張の面持ちでいっぱいだった新入職員たちも、段々と佑啓会の職員らしく凛々しい顔つきになってきました。新緑が映えるフレッシュな新入職員三十八名と共に、佑啓一八号をお届けします。

(支援員 栗川克明)